

クリスマスおめでとうございます。

主のご降誕を心から喜び祝い、来臨の主を待ち望みます。

伝道の幻を語ろう会

岩田昌路・岡村 恒・小泉 健・
小林克哉・小宮山剛・清藤 淳・
橋本いずみ・山畑 謙・横山良樹

クリスマス、御子なる神はマコトの人となってくださいました。

わたしたちのすべてを、罪を、死を担い、十字架で贖いの御業をなさるためです。

主はマコトの人となり、十字架でその肉を裂き、血を流してくださいました。

主はご復活なさり今も生きておられます。

そして主はご自身のすべてを、御体と御血潮をわたしたちに与えてくださいます。

その恵みを深く覚え、聖なる神への愛と畏れを新しくしていただきたいと願います。

わたしたちは福音主義合同教会形成論（教団論）のための提言をさせていただいています。

先にイースターメッセージとして

提言1「悔い改めへ招かれて」と提言2「教団機構改定について」を発信しました。

そこで、教団紛争による日本基督教団の崩壊が、

今や未受洗者陪餐の広がりにより各個教会の崩壊として進んでおり、

危機が一層深刻さを増している信仰告白的事態であると声を上げました。

この度、わたしたちはクリスマスメッセージとして

提言3「聖餐についての提言1—『開かれた洗礼』のために召されて」を

発信させていただきます。

洗礼共同体であり聖餐共同体である主のみからなる教会を立て上げていきたいのです。

福音主義合同教会を形成するために、この提言が祈りの課題を明らかにし、

主への献身の思いが奮い興されることを願っております。

伝道の幻を語ろう会

岩田昌路・岡村 恒・小泉 健・
小林克哉・小宮山剛・清藤 淳・
橋本いずみ・山畑 謙・横山良樹

「聖餐についての提言1……『開かれた洗礼』のために召されて」

はじめに…聖餐をめぐる議論は誰のために

人の前ではなく、聖なる神の御前で語るができる言葉をもって、わたしたちは洗礼について、また聖餐について語り合い、その恵みを分かちあう教会です。

わたしたち日本基督教団では、もうかなり長い間、いわゆる「開かれた聖餐」が各地の教会・伝道所で密かに行われてきました。中には半世紀以上、「洗礼を受けていない人も聖餐のパンと杯を共に受けること」が当然のこととして行われてきた教会もあると聞いています。その状態に気付いた者の内、それがわたしたちの教団にとって見過ごすことのできない「信仰告白的事態」であることに心を痛めた者が、各地で声を上げてきました。今、教会の崩壊の状況をそのままにして来た罪を、わたしたちは聖なる神の御前で悔い改め、赦しを乞い求めます。教会がそしてこの状況が一日でも早く変えられるようにと主の導きを祈り、すべきことをなしていきたいと思うのです。

日本基督教団は、「洗礼と聖餐」が切り離されることができない「サクラメント」であること、「洗礼から聖餐へ」という秩序を大切にしてきた教会であることが、改めて意識されるようになりました。そのような中で、2007年10月、いわゆる「北村教師に対する教師退任勧告」が出されました。この出来事を契機に、「聖餐」をめぐる議論が、多種多様な仕方で開催されるようになりました。

しかし過去の議論を振り返ってみると、かつて教団の宣教研究所が『聖餐』（1987年）、『陪餐問題に関する資料ガイド』（1990年）を出した頃からもう既に、「オープン」という言葉が意図的に誤用されてきたことに気付かされます。なお、2017年、宣教研究所委員会は「当該資料は宣教研究所の公的発行物として責任的に位置づけることはできない」と決議し、誤りをただしています。

本来、教団や教派の違いを超えて共に主の食卓を囲もうというのが「オープン聖餐」でした。しかし、ある人たちは意図的にこの「オープン」という言葉を「未受洗者の陪餐を認める」という意味で流布し、いまだにこの誤用がまかり通っています。さらに、日本のような伝道地とは状況が異なる海外の諸教会が、「洗礼から聖餐」という秩序を重んじながら、「礼拝出席者の内の未受洗者が聖餐に与ることを希望する場合の特別な取り扱い方」について論じ、規定していることを取り上げて、あたかも「未受洗者陪餐」が世界の趨勢であるかのように伝えてきました。

今日、日本基督教団の教勢は悲惨な状況を呈している、といっても良いでしょう。確かに、日本で一番大きなプロテスタント教団ではありますが、実は小さな群れなのです。主

日礼拝出席者数は、全国の教会・伝道所を全部合わせても、サッカースタジアム一つを満杯にすることさえできません。年間受洗者が一千人を切った時、本当に大変なことになったと多くの方がざわつきましたが、今や700人以下にまで落ち込んでいます。わたしたちが「聖餐」について議論している間に、本来洗礼へと招かれていておかしくない多くの人々を、招きそこねてきたのではないか、と思うのです。

「開かれた洗礼」にすべての民を招くために

わたしたちは主に召され、御言葉を聞く機会を与えられ、主イエスを信じる信仰へと導かれ、やがてその信仰を告白して罪の赦しの洗礼を授けられたのです。そのわたしたちに主イエスは、すべての人に福音を宣べ伝え、洗礼を授けよとお命じになりました。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイによる福音書第18章18～20節）

わたしたちが召されたのは、「行って」、「弟子にし」、「洗礼を授け」、「教える」という主のご委託を担い、果たすためです。ここでわたしたちに命じられていることの本心は何よりも、「すべての民」を、「洗礼」に招き入れることです。それゆえこの洗礼は、「すべての人に開かれた洗礼」に他ならないのです。

伝道者が立てられ、世界中に派遣され、教会が建てられていったのは、すべての民を洗礼に招くためでした。あの聖霊降臨の日、ペトロの説教を聞いて悔い改めた人々は、罪の赦しの洗礼を受けました。だからこそわたしたちは、この日がわたしたちの教会、全世界の教会の誕生日だと祝い続けてきました。代々の教会は、一人の人が悔い改めて洗礼を受ける時、「悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」（ルカによる福音書第15章7節）ことを思い起こして、地上にありながら、天の喜びと一緒に分かちあって喜んで歩んできたのです。

ただ一度きりの罪の赦しの洗礼は、「目に見えない神の恵みの、目にみえるしるし」と呼ばれる「 sacrament」の一つです。この神のみ業は、すべての人を招いています。だからこそ主イエスは、弟子たちに、そしてわたしたちに向かってすべての民への伝道をお命じになったのです。そして洗礼を授けられた者が、いったい自分が何者であって、どこから来て、どこへ行く者かを繰り返し思い出して歩むことができるようにと、「聖餐」の恵みが与えられています。この繰り返される神の恵みは、神の招きに応えた者を、神の恵みの下に留まらせ、御国への旅を終わりの日まで歩み抜くことができるように支えます。洗礼を授けられて神の民に加えられた者が、地上の旅を続けながら主のご再臨を待ち望む時、聖餐の食卓は、復活の主が共に歩み、その命を確かに与えていて下さることを保証します。主の十字架の意味も、今生きておられる主のご臨在の確かさも、終わりの日の天の食卓の約束も、わたしたちはこの聖餐の食卓において確かめ、さらに固く信じて歩むのです。

古来、聖餐を伴う礼拝の最後には、必ず派遣の言葉が読まれていました。初代教会の人

々は、大きな喜びを持ってキリストを記念し、そこから遣わされて、新しい仲間を主の食卓に迎え入れるためにキリストの福音を宣べ伝え、洗礼の恵みへと招き続けて歩んだのです。

『日本基督教団教憲および教規』は、日本基督教団という教会の形を規定していますが、信徒については「本教団の信徒は、バプテスマを受けて教会に加えられた者とする。」（教憲第10条）と明確に規定しています。そこから、「信徒は、陪餐会員および未陪餐会員に分けて登録しなければならない。ただし、未陪餐会員のない教会ではこの限りでない。」（教規第134条）、「陪餐会員とは、信仰を告白してバプテスマを領した者、または未陪餐会員で堅信礼または信仰告白式を了した者をいう。」（同第135条）と教会の枝について規定しています。教会の意志決定を行う教会総会の構成員についても「教会担任教師および現住陪餐会員たる信徒をもって組織する。」（同第94条）と定めています。つまり、未受洗者陪餐を行っている教会は、未受洗者を神の民の食卓に招き入れながら、同時に、教会の信徒には加えず、地上の教会の意志決定からも排除する、というきわめて非聖書的な差別を行っているのです。

2012年開催の第38回教団総会において、「洗礼と聖餐の一体性を確認する」ことが議論されましたが、それは内容的には信仰告白、教憲および教規の解釈に関する議案でした。総会はその判断を常議員会に付託し、第38回総会期第1回常議員会はこの二つの聖礼典の「一体性と秩序とを確認する件」を全会一致で可決しました。こうして日本基督教団は、洗礼と聖餐が切り離しがたく結びついていること、洗礼から聖餐へという秩序があることを公けに確認して歩んできた教会なのです。聖餐に関する個人的な主張は人それぞれあって良いのですが、全体教会として判断ははっきりしています。

しかし同時に、「合同教会」としてどこまで一致することができるか、という大きな課題にも、わたしたちは直面しています。「福音主義合同教会」を形成するために、1968年の「機構改定」は教会一致のはるかかなたに目を向けていました。組織の形を変えて行くその先に、合同教会の一致をという課題を掲げていたのです。紛争によって、組織の改定も一致運動も頓挫してしまいましたが、今改めて、「聖礼典に関して、どこまで一致できるか」という課題が問われています。合同教会に入る時、この教団の聖礼典を受け入れるという大きな決断をした群れもありました。わたしたちはその決断の重さをも、改めて思い起こすべきなのです。

わたしたちはもう既に、多くの点において一致をしています。洗礼を授けられて神の民の一員とされた者は、地上でもキリストのみ体である教会の枝に加えられ、主の食卓を囲み、礼拝と奉仕、重大な意志決定の責任を負いつつ歩みます。この豊かな主の恵みの食卓に、一人でも多くの民が加えられるために、先に召された者は、信徒も教職もこぞって福音伝道のために生かされているのです。

「聖礼典問題」の根本にあるのは「教師問題」

聖礼典をめぐる諸問題は、そのほとんどが教師に由来しています。「復活をし、今生きておられる主への献身の喪失」こそ、教会の土台を揺るがしてきた根本的な問題なのです。

これまでの聖礼典をめぐる発言や記述を目にしてきて、そこから教団の歴史を振り返ると、明らかになることが一つあります。それは現在、わたしたちが直面している多くの議論が、元をたどると「教師」の問題に辿り着くことです。

いわゆる「教団紛争」を引き起こした悪魔的な力は、その初めから「教師」に的をしばって、一点突破型でわたしたちの教会に戦いを挑んできました。日本基督教団を主のみ体なる教会でない何か別のものにするために、一番の急所である「教師」を標的としてその力を傾けてきたのです。

1969年9月、後に「9・1～2事件」と呼ばれた「教団常任常議員会粉碎」と「秋期教師検定試験の中止」がその最たるものでした。「教師検定試験」、すなわち、教団が新しい伝道者を立てる、という点に最初の痛烈な一撃が加えられました。当時の状況をある牧師が分析して、「ヒューマニズムが福音にとって代わっている」と言い、また「教団の中に贖罪信仰を回復しなければならない」と叫ぶように主張しました。実はこの時、教団の中から失われ始めたのは贖罪信仰だけではなく、救い主、主イエス・キリストの復活に対する信仰であり、復活して今生きておられるキリストの現臨を信じる信仰でもあったのです。さらに元をたどると、聖書を神の言葉と信じる信仰も、代々の教会の歴史の中に神の摂理を見る信仰も、この紛争の時から、徐々に、そして確実に教団教師の中から薄れ去っていくことになりました。実際、紛争当時の会議記録などでは、主イエスの復活を否定したり、主イエスをメシヤ、キリストと告白する者をあざ笑うかのような発言が重ねられました。まずは教師の中から、主の復活への信仰が失われ、それゆえ、今生きて働き給う主への献身も、忠誠も失われていきました。

教会において様々な事情ですぐに洗礼を受けることが困難な方や、洗礼への招きの前でお躊躇している方と共に聖餐の食卓を囲み続けるには、臨在のキリストへの信頼が不可欠です。人間の思いや力に頼るのではなく、招いてくださるお方の力にお委ねすることが必要な場面にわたしたちはしばしば遭遇するからです。誰も排除したくないという思いや、すべての人を受け入れる優しい存在だと評価されたいといった誘惑が、キリストへの忠誠に取って代わることが、教師の内面で起こってきました。

わたしたちはこの半世紀、教団の教師が狙い撃ちにされてきたことに、あまりにも鈍感でした。具体的な教会の歩みや、教会、教区、教団が外に向けて発信する言葉にばかり気を取られて、教団内部で進行していた崩壊現象に気付かずに、あるいは気付いても大きな問題として捉えきれずに過ごしてきました。その間、わたしたちの敵は、周到にその影響力を強め、教師から教会へ、信徒の心の奥底まで不信仰の種をばらまき続けてきました。

さらに、日本基督教団は国内外の諸教会との交わりの中で生きてきました。韓国の3つの教会、台湾長老教会をはじめ、いくつもの教会との間に宣教協約を結び、また歴史も大きさも大きく異なる海外の諸教会からも対等な兄弟姉妹の群れとして扱われてきました。その際わたしたちは、『日本基督教団信仰告白』と『教憲・教規』とをもって諸教会に対して自己紹介をしてきました。わたしたちが何を信じ、告白し、どのような体をもった教会であるかを、教団外の人々はこれらの告白と規則を通して理解し、受け入れてくださいました。そのような中、洗礼と聖餐の順序を無視して未受洗者陪餐を許容する教会は、自

分たちが国内外の諸教会に対して大きな裏切り行為をしていることを自覚する必要があります。自己紹介をして交わりを持ちながら、裏でこっそりと別の形の教会を形作る行為は、自分の言葉に責任を持たない者の姿です。

わたしたちは今や、教団の中において様々な場所で「言葉が通じない」体験を重ねています。その根底には、「キリストへの献身」の喪失、という大きな課題があるように思われます。「主イエスは復活させられ、今、生きておられる。このお方が、わたしたちを召して、信徒として、あるいは教師として立て、み業にお用いくださっている。」ただこの一点を共有することができたら、わたしたちは同じ主のもとで言葉を共有できるはずなのです。

わたしたちに委ねられた「すべての民」に開かれた洗礼の招きを、大胆に宣べ伝えることは、わたしたちの喜びです。やがて天からあふれ出てくる大きな喜びを思う時、わたしたちに託された務めがどれほど困難に見えても、わたしたちは恐れることなく、生ける主の御前で、力強く語り、歩むことができます。

「開かれた洗礼」から「天の御国にまで広がる聖餐の食卓」へ

すべての人を招く洗礼の恵みは、わたしたちを天の食卓へと結びつけます。わたしたちは今、洗礼の恵みを信じ、聖餐の測り知れない力を信じるころから新しく歩み始めます。

地上にあって聖餐の食卓を囲む時、そこでわたしたちは天の食卓の喜びを先取りしています。キリストの命を味わい、キリストの血がわたしたちの体中をかけめぐるので、わたしたちは永遠の命を頂いて生かされていることを思い知ります。そしてこの食事は、わたしたちの内にある「天の食卓への憧れ」をかきたてるのです。「主よ、来てください」と叫ぶように祈りながら、わたしたちは聖餐の食卓へと進み出ます。罪の赦しの洗礼を授けられ、もう既に神の子とされた者たちは、こうして喜びの食事に養われて天の御国を目指して歩みます。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって、「聖餐への激しい飢えと渇き」を味わった信仰者が大勢います。洗礼によって命に移されていることを確信しながらも、聖餐の食卓から長く遠ざかっていると、命がひからびてきて、飢えと渇きによって神ご自身からさえ引き離されているように感じた、と証ししています。わたしたちはこの飢え渇きに注目します。未受洗者陪餐などしていないのはあたり前としても、本当に聖餐の恵みを信じ、その力強さを知っているかと問われると、すぐに「はい」と答えることができない、そういう現実があるのではないのでしょうか。コロナのために聖餐礼典を何ヶ月も執行できなかったが、誰も特に不都合も欠けも感じなかった、としたら、その教会に本当の命があるのか、と問われるのだと思います。わたしたちは、主の命を軽んじできたことを悔い改めます。「わたしを信じる者は、死んでも生きる」と言われた主イエスは、わたしたちの信仰を支えるために聖餐を制定くださったのです。

召されたわたしたちに託されている務めは、何と驚くべき喜びに満ちていることでしょう。今、病いが襲ってきても、戦争や自然災害の恐れがのしかかっても、決してゆるぐことのない「本当のこと」を求めて飢え渇いている人々が大勢います。今こそ、洗礼へ

の招きが世界中で、大胆に宣べ伝えられる必要があります。世界は洗礼を受けて神の民になりたいと願い求めているのです。

終わりに：聖餐がどのようなものになっているのか、立ち止まって確認してみる。

洗礼を受けた者たちだけが聖餐に与っている教会も、主の食卓の前で立ち止まり、もう一度悔い改めて歩み始めることが必要だろうと思います。礼拝に出席できることをあたかも当然のこととし、あたり前のようにパンと盃とを受けていないか、聖霊は繰り返しわたしたちに問いかけます。一人一人、自分自身が「主の食卓にふさわしくない者」であることをどれほど深く受け止めてきたかを思う時、わたしたちは恥ずかしくなります。礼拝は神のみ業、奇跡の出来事です。ましてや、キリストの命に与る聖餐は、この世のものではなく、神の国の出来事に他ならないのです。

ある教会では、聖餐礼典が執り行われる前週の週報に、「次週、聖餐に与るために、準備の祈りを絶やさないように一週間を過ごすように」との勧めが必ず記されるそうです。ちょうど、洗礼を受けようとする人がその日のために祈りつつ備えて歩むように、聖餐に与る者も皆、主の食卓に備えて一日一日を生きるべきなのです。またそのような歩みへと一人一人が押し出されるように、聖餐の「感謝の祈り」や「派遣の言葉」に工夫をしている教会もあります。

未受洗者の陪餐を許している教会では、その聖餐が、本当にすべての人をまことの命に招く食卓になっているかどうか、立ち止まって確認して欲しいと心から願います。どうか共に洗礼から聖餐への秩序へと教会の歩みを変えてください。主の招きがそこで大胆に宣べ伝えられ、その招きへの応答が、パンと盃とを受けるという具体的な行為によって現わされているなら、洗礼を受けないという選択肢などもはや陪餐者には残されてはいないこととなります。主の命がけの招きに、命がけでお応えしているのですから。そこでは主の食卓に与った者が次々と洗礼の恵みに与り、そこから遣わされて主を宣べ伝えているでしょう。もしそうでないなら、どうぞ、洗礼と聖餐の一体性と秩序について思い巡らして、より良い選択をして歩んで頂きたいと思います。

以上